

FADO

22

Abril 1999

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

3)

月田秀子の昨日、今日、明日

2年ぶりのリスボンでの2週間程の滞在を終え、2月20日朝、帰国。帰路パリでは、乗換え便に間に合わず、急遽、パリでの一泊というおまけが付き、それも、3食、バスタブ付のホテルにただ泊まれたのだから、嬉しくて、エッフェル塔にのぼり、ついでに、マドレーヌ広場のフォーションへ行ってチーズを買ってきた。も一つついでにタイクバンでマール・ド・シャンパーニュといきたかったが、それは時間切れで叶わなかった。そのごりやくあつてか、年末パリでの2000年カウントダウンのイベントで歌える事になる可能性大。

リスボンでは、1993年の堺でのコンサートの時、楽屋で会った以来6年ぶりで、アマリア・ロドリゲスに会えたと、本当は、ルンルンで帰ってきてもいいはずなのに、3月一杯、ファドが見えなくて、私の心は行方知れずになっていた。

会報も手付かず、6月のきまぐれライブも宙ぶらりん、しなければいけない事がたまってゆくのをはるか下に見ながら、ひたすら、糸の切れた風船のように宙を漂っていた。風任せにしている事が無性に心地良かった。ファドを本格的に歌い始めてから11年間、ファドを友とし、恋人とし、生きてきた。もちろん、その間に、恋も幾つかしたし、人を傷つけ、恋に苦しみ悩んだ事もあった。マイナーである事を引き受けた者として当然ながら、雑務に追われ、ファドとまともに向き合えない苛立ちの日々もあった。優等生のごとくに、自身の歌手としてのマネージメント、そして、ファド倶楽部の会報発行、運営をなんとかこなしてきた。それらの「たが」が一遍に外れてしまったような日々だった。私を現実に結び付けているすべてのものを断ち切りたかった。こうして人は時々行方知れずになってゆくのかと、薄れてゆく義務感、使命感の中で思った。そんな私を見兼ねて、私を支え、助けてくれていた人までもが、去ってゆく後ろ姿を見た時、私はやっと目が覚めた。

一か月振り位に、プールへ行った。顔なじみの人達に「瘦せたね別人かと思うくらい。長い間見かけなかったから体の具合でも悪いのかと思って心配してたのよ。」と言われた。ホームページのライブ予定も、4月以降何も載っていないので、どうなっているのかと心配していたという声も聞いた。

そろそろ現実に戻る支度を始めている今日この頃の月田です。

月田秀子

月田秀子のポルトガル紀行

—1999年2月リスボン編 その1—

2月5日夜10時、パリ経由のエアーフランス国営航空で無事リスボン着。関空を昼前に発ち、パリまで14時間、パリからリスボンまで1時間半、合計15時間半の飛行時間になる。日本との時差は、9時間、時計をその分遅らせる。なぜか得をしたような気分になる。

画家で、ファドの曲もかつて作曲した事のあるジョゼが、車で迎えに来てくれた。喉頭癌の手術で声を失ってから、何年になるのだろう。今では、かすれてはいるが会話はほとんど通じる。その声で唄うアームストロングばりの『As time goes by』は絶品だ。

無事、定宿にしているPensão Nova Silva にチェックイン。シャワー付、トイレは無し。一泊4,000エスクード(日本円で約3,000円)バルコニーから、二年振りのテージョ河の夜景を見る。

12時前には、パイロ・アルトのファドの店『NÓNÓ』のギタリストの真ん前の椅子に座っていた。CD『リスボンの涙』でファドを唄っているベアトリス・コンセイサオンが出演している店で、今回どうしても来なかった店だ。オーダーした赤ワインのグラスを口に運ぼうとした時、ギタリストが「上を向いて歩こう」を、こちらを見て、ニコニコしながら弾き出したのはまいった。「ここでは、ただの観光客で通そう」と思いながら、彼のサーピスに答えるように口ずさんだ。ベアトリスが激しく咳き込みながら3曲唄い終わった後、ワインの程よい酔いも手伝って、彼女のテーブルへ行き、「はじめまして、日本からきました。貴女の歌をCD『リスボンの涙』で聞いて感動し、訪ねてきました。」と告げる。意外な客に驚いた様子で「今日は風邪でご覧の様。」リスボンでもインフルエンザは猛威をふるっているらしい。

1月に、何年ぶりかで、1週間程寝込んだ後、私自身もまだ風邪から抜けきっていなかった。今年の風邪はひどかった。3日間ほど39度の高熱が続き、体中が痛く、生きた心地がしなかった。幸いライブは、何とかこなしたものの、声の出ないライブは聞いている客共々、危機感にあふれていた。

そうこうしているうちに、CD『リスボンの涙』で、渋い声を聞かせているアントニオ・ローシャが、入ってきて、私を知っているという。テレビで見たと言う客のリクエストで、結局、3曲唄う羽目になる。ベアトリスに劣らない程咳き込みながら、ギタリストも目を丸くしている。「歌ってもらったのだから」と言って飲み代はとらない「滞在中毎日歌いに来い」というオーナーは、なかなかの商売人だ。帰ろうとすると、ベアトリスが、車で送るという。一人歩きは危ないと言う。遅くなりそうなので丁重に断る。

通い慣れたオレンジ色の街頭に照らされた石畳の道を、二年ぶりに踏みしめながら10分程歩いて、ペンションにたどり着く。入り口のベルを押す。ガシャと鍵の開く音。重い木のドアをおもいきり体を預けるようにして押し開ける。安物のカーペットが敷かれた大理石の階段を上ると3階に受付がある。高さがまちまちで傾きかけているこの階段にも1週間ぐらいたれば、慣れるだろう。階上で眠そうに赤い目をこすりながらセニョールが待っている。私の息は、ぜいぜいと音を出す。「Boa noite (おやすみ)」鍵を受け取り、それから5階にある部屋に、足音を忍ばせながら上がる。ベッドに倒れるように横たわる。3時を回っている。今回は、何とせよ、毎晩、くまなくファドのお店を足踏するのだ。と言いつつも、いつか眠りに落ちた。しかし、その誓いは、4件目で挫折する羽目になる。観光客相手の店には、私の求めるファドはなかった。その為に費やす時間と金の余裕と忍耐力を私は持ち合わせていなかった。

翌朝、6時過ぎに目が覚める、外はまだ暗い。テージョ河は、岸辺のオレンジ色の街頭に縁取られながらまだ眠りから醒めない。

朝一番に、オーロ通りのレコード店『AMÁLIA』を訪ねる。店の階段を下りると、今年82才になるマヌエルが両手を広げ、「ああ、秀子、これは夢じゃないね。まるで奇跡のようだ。」と涙ながらに抱きしめて迎えてくれた。その日から、毎朝、一緒に朝食をとることから一日が始まる事になる。彼はいつもレモンティ、私は、ピカ(エスプレッソコーヒー)と、彼のおすすめで、今日本でも人気の「エッグタルト」の元祖パスタル・ド・ナタだったり、鱈のコロッケだったり鱈の揚げ身の揚げ物—それは、まさに薩摩揚げだった—その時は、我慢しきれなくなってビールを頼んだ。

「Uma imperial, por favor !」(ビールを一杯 !)

ルネサンスの歌と、こんにちのファドとを
ひとつに溶け合わせるリスボンの“涙” [2]
パウル・ファン・ネーヴェル 濱田滋郎訳

誤解を避けるため強調しておかねばならないのは、ファドがけっしてポルトガル全体にかかわる民衆的国民音楽でもなければ、民俗音楽でもないことだ。ファドは、ヨーロッパの都市音楽の最後の生き残りともいえるべきものである。たとえばブダペストの都市音楽は、第2次世界大戦の渦の中に失われてしまった。ダブリンの都市音楽は、それと識別できぬまでに商業化されている。アムステルダム、ヨルダン地区で歌われてきた耳当たりのいい歌たちにしても、切れ目のない伝統をたどることはできないし、また、その哀れっぽいセンチメンタルさや、精神的内容性や歌詞の意味深さの欠落によって、ファドとはどうにも比べられない世界のものなのだ。

ファドは、しかるべき時代と環境に結びつけられた地方的な芸術である。しかし、そこに映し出される感動は、時を超えている。ローカルだという理由は、その歌詞がつねにリスボン、しかもその特定の地域と結びつき、また、これが2つの発音、ギターラ・ポルトゥゲーザ(ポルトガル・ギター、6対の複弦と17個のフレットを具えた首長リュート族[訳者注-さらに言うならシターン〜イングリッシュ・ギターの系統]の一種)およびヴィオラ(一般にいうギター[スペインッシュ・ギター]のこと)によって常に伴奏されるところにある(コインブラ[ポルトガル中部海岸寄りの文教都市]は、歌詞内容および伴奏のしかたにおいて、リスボンのそれとは全く異なったファドがある)。またファドは、もっぱら夜に歌われることにおいて、特定の時間を持つ音楽だと言える。悲しみの感情サウダーデは、闇と静けさのうちに醸し出される内密さにこそ結びつくのであり、ファドの歌詞において最もひんぱんに使われる単語が<noite>(夜)であることもそれを立証している。

そしてファドが生まれ育った環境は、当初から、歌詞、音楽、演奏者たちなどいずれの面から見ても、社会的には、かばしくないといえるそれだった。時間刻みで借賃が払われるような安宿で生まれたファドは、もともと、市内の一面に住む、貧しく抑圧された人びとの慰め、ないし人生の解毒剤として存在した。最古のファディスタ、マリア・セヴェーラ(・オノフリアーナ、1820-46)は娼婦であり、ファドの歌詞の中に最もよく登場し讃えられる女性の一人は、聖書のマグダラのマリアである。

19世紀の末近くに至って、ファドは、リスボンの貴族的サロンで、一種ものめずらしい歌として愛好されるようになる。だが、20世紀の初頭には、政治的な理由から、それは再び地下に追いやられるものとなっていた。ファドは長らく芸術の一形式としての真価を認められずに過ぎたが、その理由は、ひとつにはそ

の伝承がもっぱら口伝えで行われたからであり、また同時に、夜ふかしする人びとの秘められた環境の中にあつたからでもある。ファドは時代を超越しており、表現される情感、イメージ、用いられる語法は、いつという時代にかかわらぬものである。だがそれは、ほかのいかなる国、いかなる街のものでもない。私はこれまで、たとえば、自分の街をこれほど純粋な情熱とともに讃美するブリュッセル市民には会ったためしがない。あるレストランの聴衆を、年じゅう毎晩のように、たとえば「わたしの身体は港を持たない一隻の舟……」(ベアトリス・ダ・コンセイサンが当CDで歌っている)といった言葉により、これほどまで夢中にさせ得るパリの歌い手を私はまだ知らない。

何よりも、ファドは詩的な芸術である。“詩人たちの街”にふさわしいものである。誰であろうと、リスボンの古いコーヒー・ショップに入ってみた者は、そこ、かじこに掲げられ、あるいは記された詩なり、手紙の一節なり、記念の文字や走り書きなりに目を奪われるに違いない。聖堂内の栄誉ある人びとを顕彰する場所に一大統領たち、元帥たちが多いのはここも例外でないにせよリスボンほど多くの詩人たち、作家たちが祀られている都市を、私はほかに知らない。

ファドが国民音楽、民俗音楽ではないという事実は、その歌詞が必ず、ファディスタたち自身あるいはファドの雰囲気から体験した詩人たちによって書かれるところにも見られる。ファド歌手たちが彼ら自身どこまで詩人を兼ね得るかを強い感銘を受ける機会は、私にとり、1995年5月に催された、同年度ファディスタの集会の折りに訪れた。そこで彼らは、全体としてみれば長い詩の形をとる、“問いと答え”の即興的な歌くらべを行なってみせたのである。彼らは前ぶれなく、互いに詩の形で問いをぶつけあい、同じく詩の形で答えを返しあつた。私はそのとき、中世に行われた詩作の競技の場に運んで行かれた思いを味わつたものである。

リスボンは常に、その感傷、サウダーデによって知られてきた。手が届かぬ愛への憧れ、孤独の重荷、恋人のつれない拒絶、あるいはこの都市への総体的な讃美といったテーマは、けっしてファドのみの本質とは言えない。それらは同時に、ルネサンス期このかた、ポルトガルの世俗的な文芸一般に共通する主要主題となつてきたものなのだ。

リスボンとて、長い年月のあいだに変化を重ねてきたことは疑いない。しかも、この街の魂と、それを表わす文芸とは、同じひとつの性格を保ちつづけてきたのである。ヴィランシーゴ、ファドの双方に表現されるものは、大西洋のほとりに、ヨーロッパの入口でもあれば出口でもある最果ての位置を占めながら白昼夢を見つづける都市の、限らないメランコリーなのだ。

『リスボンの涙』(SONY SRCR 1866)

ファドとの出会いと‘難船’について

一文を書いてほしい言われ、今日あなたのファドを聴いて思ったことを書いてみる。

思えば、月田秀子のファドを知つたのは全くの偶然。仕事の関係で新年の挨拶廻りを終えて家に帰り、やれやれと思つてTVのスイッチを入れた時NHKの番組から聞こえてきた‘難船’。久方ぶりに感動を覚えた。どういう感動かと言うと、何とも表現しがたいが‘人間とことん生きなければ’というような。早速NHKに問い合わせたら、あなたはミナミの某所で歌っていると教えてくれた。そして某所にあなたのファドを聴きに行った。丁度大震災の数日後のことだった。あなたは、「こんな時にファドを歌っているのかしら」と言いながら、「矢張り歌おう、」と歌つた。

あの時歌つた‘涙’とその時あなたの頬をつたつた涙。あの感動以来もう4年の歳月がたつた。その間沢山のファンが増えて本当に良かった。もっともあなたを歌を解ってくれる人々が沢山増えることを心から願う。

今日も聴いた‘難船’について。

あなたは今日もその歌詞の意味を上手に解説した。自分の大切な夢を自分の手で海に沈めたと……。

でも私は思う、その後はどうなるのかと。たとえば、大切な宝石箱に入れて沈めたとしたら……。その時は、タイタニックのように、何百年後にたまたま引き揚げられてオルゴールの美しいメロディーと共にあなたが言葉にした夢がまた語られるのか。

あるいは、沈めた夢を、魚たちが食べてるのか。そしてその魚たちが……。などとたわいなことを思う。同時に、こんな俳句を思い出す。

‘告げざる愛雪嶺はまた雪かさね’ 昨年なくなった上田五千石の句。
‘難船’が海ならこの句は山。

そんなことを思い、今日も楽しくファドを聴かせてもらった。

ありがとう。これからも、もっともつといい歌を聴かせてくれることを願う。

春愁や ファド部屋に充つ 薄明かり

(大阪/K.K)

拝啓

深まりゆく秋でした。

憂うことの多い秋でした。

思いっきりアクセルをふみこみどこまでもどこまでも続く道をあなたの唄をききながら走りました。とても切なくなりました。ファドが秋にこんな似合うとは思いませんでした。

そして今、マイナス20度、どこかでピシッ!としばれる音...

今夜もしばれるなあ...と思いつつ仕事をしています。

あなたの唄が流れます。

厳寒のじまの中で聴くファド、今の私の心のさげび。

あなたが唄ってくれる私のさげび、ありがとう

(北海道/T.M)

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖[その16]

内間 天馬

秀子と酒 その2

天馬(以下、馬)「えー、きょうは秀子さんにインタビューという事で、ミナミは島之内にあります居酒屋ながほりさんにお邪魔しているんですが、秀子さんはやはり日本酒がお好きで...」

秀子(以下、秀)「そうね、何でも好きだけど、日本酒がいわね。仕事を終えて、ホッと一息ついて、この店に置いてるような素晴らしい本物のお酒をいただく心が洗われるような気がするの」

馬「どういふ方とお呑みになるんでっしゃるか？」

秀「できればステキな彼氏と...(ポツ)」

馬「どんな彼氏が理想ですか？」

秀「そうね、石鹸の香りのする人...」

俺、もう一週間も風呂入ってへんぞ)

秀「ジェームス・ディーンみたいな人、ステキ...(ポツ)」

(アカン、俺似ても似つかんぞ)

馬「秀子さん、その冷奴、薬味も醤油もなしで食べはるんですか？」

秀「そう、このほうがお酒の味が引き立つのよ。この十四代というお酒、今すごく評判なの。何種類かあるけど、これは特に中取りって言って

ちょっと贅沢なお酒なの」

馬「マスター、僕にも同じのをください。ヒューツ、こんな旨い酒があったんですか、この世に！」

秀「私、お酒は純米吟醸、ビールはサッポロの黒ラベルがいわね」

馬「アテはどんなものを？」

秀「冷奴、タラのコロッケ、塩ウニ、それと鮓ずしも大好きよ。それと、モルトウイスキーには、かつばえびせんも合うわよ」

馬「さて、突然、ミナミは法善寺にある、モルトウイスキーの店ギルティに場所を移した訳ですけど、この店では何を？」

秀「最近、アイラ島のウイスキーに凝っちゃって...。ラガプリンなんか好きよ」

馬「ヒューツ、ほんまにたまりまへんなコレ」

秀「あら、何故か突然私の父が来たわ。お父さん元気？ 私ね、先日、呑み過ぎて記憶を失くしちゃったのよ」

父「秀子、月田家は代々酒で人生をあやまる者が多いのじゃぞ。わしの父はメチルで目をつぶし、叔父は酔ってころんでびっこになり、兄は酔った勢いで変な女に手を出し、結婚させられる羽目になったのだ。お前もどこの馬の骨に引かからないよう、くれぐれも酒は控えるように！とここでそこにいる男は何者だ？」

秀「こちらは馬の骨じゃなくて、ただの馬さんです」

(P.S.)秀子さんにインタビューしたら、たぶん、上のような感じになるのではないかと...。次回は月田秀子に遭遇できる(かも知れない)お店をご紹介します。お楽しみに!

vamos cantar!

壊れた鏡

訳詩 :Caldo Verde

風が鋭いムチとなって
鏡のような水面を砕く
私の心はもっと無惨に砕けた

何故なら風は吹き過ぎるとき
あなたの名前を囁いたから
囁いて私を残して行ってしまった

またたく間に行ってしまった
私を打ちのめしたとも知らずに
苦しみだけが深々と根を下ろした

けれど風はガラスの湖面に
切り絵のように描いていった
囚われ人の私の姿を

ああ こぼれ落ちる
水晶の涙よ
私は激しい風を虚しく求めた

惨めな私が映る鏡を壊してくれたら
涙をぬぐってくれたら

私から去っていったあなた
去っていったあなた
心の中で
風はいつそう吹き荒れた

ESPELHO QUEBRADO

Música:Alain Oulman

Letra:David Mourão Ferreira

Com o seu chicote o vento
quebra o espelho do lago
Em mim foi mais violento o estrago

Porque o vento ao passar
murmurava o teu nome
Depois de o murmurar deixou-me

Tão rápido passou
Nem soube destruir-me
As mágoas empeçou tão firme

Mas a sua passagem
em vidro recortava
No lago a minha imagem de escrava

Oh líquido cristal
dos meus olhos sem ti
em vão vendaval pedi

Para que se quebrasse
o espelho que me enluta
e me ficasse a face enxuta

Ai meus olhos sem ti
sem ti
Em mim foi mais violento
o vento

informação

●倉吉の陶芸家、河本賢治氏の個展の日取りが決まりました。

6月9日(水)～15日(火)阪急百貨店6階美術画廊III

彼の作品、そして人柄に触れ、ファンも着実に増えつつあります。淡々と土と語りかける彼の姿勢は変わりません。ぜひ、お出かけください。

●毎月最終月曜日にライブをしているアートクラブが6月から下記に移転します。ミナミ笠屋町と八幡筋の南西角、山田第二ビル4階。(大阪市中央区東心斎橋2-6-28 電話番号は変わりません。)スペースも今よりずっと広がるそうです。

●先日、大阪サンケイホールでの「ザ・ニュースペーパー」のステージにゲスト出演された黒田清会長にお会いする機会がありました。相変わずの笑顔で「月田さん、ちょっと肥えたとちゃう?」「(先生、ご自分が痩せたから、そうみえるんとちゃう?)」痛々しい程痩せられた先生の温和なその表情に、余分なものをそぎ取った青年の精悍さを感じました。時々発熱するという。死を覚悟した上で、この世の不正と戦う気迫にみなぎっているようで私の心が発熱しました。

事務局移転します!

長い間月田秀子の自宅兼だった事務局ですが、ポルトガルワインの「播磨屋」の山本氏のご助力で、机を一つ置かせてもらえるところが見つかりました。専用のオフィスではありませんので、皆さんが集ってもらえる様なスペースではありませんが、とりあえず空間的には公私混同状態から抜け出せて月田は大喜びです。そこに専任してくれる人およびマネージャーがいれば、月田はさらにはばたけるだろうな。

<月田秀子ファド倶楽部事務局> 〒542-0072 大阪市中央区高津 1-3-6 TEL&FAX 06-6762-3411(担当:谷口)

<月田秀子のスケジュール>

- 4月7日(水) 三裕の館 *問合せ TEL 06-6304-1745
開演 8:00
- 21日(水) 名古屋/名古屋観光ホテル マカオ観光局セミナー
22日(木) 大阪/リッツカールトンホテル 同上
24日(土) 兵庫・川西「みつなか文化サロン」 *問合せ TEL 0727-58-2283 (村上)
26日(月) アートクラブ *問合せ TEL 06-6253-0827
(1)8:00~3回ステージ(入れ替えなし)
- 29日(木) 巴里野郎 *問合せ TEL 075-361-3535
(1)8:00 (2)9:00 (3)10:00(入れ替えなし)
- 5月5日(水) 三裕の館 *問合せ TEL 06-6304-1745
11日(火) 北海道/富良野「ニュー富良野ホテル」 *問合せ TEL 0167-22-2778 (コンサート実行委員会 篠田)
12日(水) 北海道/帯広・レストラン「パタータ」 *問合せ TEL 0155-26-5566 (パタータ)
17日(月) アートクラブ *問合せ TEL 06-6253-0827
23日(日) 大阪/平野「BAR B.B.X」 *問合せ TEL 06-6707-3525
25日(火) 広島「ゲバントホール」 *問合せ TEL 082-239-1979(宏林音楽事務所)
27日(木) 巴里野郎 *問合せ TEL 075-361-3535
29日(土) 山科「京都市生涯学習センター」 *問合せ TEL 075-593-1515
久し振りにジャズピアノの四柳さんと
- 6月2日(水) 三裕の館 *問合せ TEL 06-6304-1745
6日(日) 大阪/堂山町「バナナホール」-きまぐれライブ Vol.4-
*別紙チラシを参照
- 24日(木) 巴里野郎 *問合せ TEL 075-361-3535
28日(月) アートクラブ *問合せ TEL 06-6253-0827
- <定期ライブ以外の今後のコンサート>
- 10月19日(火) 松本・スミセイライフミュージアム
21日(木) 札幌「道新ホール」 *問合せ TEL 06-6707-3525
22日(金) 函館 *問合せ TEL 06-6707-3525
25日(月) 熊本・スミセイライフミュージアム *アートクラブでのライブはお休みです
- 11月6日(土) 小諸ユースホステル
26日(金) 東京/北区王子「北とびあ」
- 12月1日~31日 パリ「World Count Down 2000」 *8月末最終決定

<編集後記>

木の芽と共に吹き出した「ずぼら病」の為、発刊が遅れました事をお詫びします。意思の疎通を図る事の難しさと、大切さを痛感しています。吹き荒れる不況・リストラの嵐、切り捨てられてゆく弱者に、ファドを重ねています。北海道からは、雪の便り。日本は広い。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ

<http://www.osk.3web.ne.jp/~fh/index.htm>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第22号
- 1999年 4月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒542-0072 大阪市中央区高津 1-3-6
- TEL&FAX 06-6762-3411